

「インドネシア大学派遣参加報告書」

京都大学工学部1回生 伊藤駿介

私は2月17日から3月3日までインドネシア大学スプリングスクールというプログラムに参加した。海外にある程度の期間滞在し、言語や文化を学ぶという経験を通して多くのことを学ぶことが出来た。

私は、この短期留学を通して他の国の文化に興味を持つようになった。このプログラムでは伝統文化の体験をした。例えば、伝統的な染め物のBatikを手作りする体験や、ワヤンという人形劇のようなもののBGMとして演奏されるガムランの体験、さらにインドネシアの楽器であるアルンバを使ってIndonesia Pusakaというインドネシア独立の歌のアレンジを演奏する体験などをした。今までは、ほとんど知識がなくBatik模様やワヤンの人形は「奇妙」というような印象しか持っていなかったが、博物館へ行ったり実際にそれらに関わっている人の話を聞いたりしてそれらについて学んでいくうちに「美しさ」や「迫力」のような人の心を動かす何かを感じるようになった。これはインドネシアの人々の感性に少し近づくことが出来たのではないかと思い、非常にうれしく思う。さらに、インドネシアではインドネシア料理が存在し、その味は自分の口には合った。味はほとんど画一化されることはない。ファストフードでもインドネシアの文化の中での独自のものが多い。日本の香辛料ひかえめ料理とは全く違うインドネシアの屋台でしか食べられない本物のインドネシア料理を食べることができて、料理にも日本とインドネシアの文化の差を大きく感じた。

さらに私は、言語を学んだことでどんどんと日常生活の中のインドネシア語が理解できるようになり、インドネシアの人と会話をしてみようかと挑戦してみることが出来た。インドネシア語の授業では日常会話を中心に学んだ。インドネシア語は日常会話などの初級のうちは難しい文法などはほとんどなく、単語の習得が主な関門となった。今回は時間も限られていることもあり、人に何かを伝えることを目標として勉強したため、細かいことを気にせずインドネシア語を話すことが出来た。今までの語学の勉強というと文法や正確性が重視され、実際に使用できる言語となるにはほど遠かった。しかし、実践と座学が上手く組み合わせることで語学は上達すると感じた。これからの言語を学習する際の参考しにしながら、積極的に日本語話者ではない人ともコミュニケーションをとっていきたい。

このように、インドネシアに少しの間滞在するという経験を通して、違った文化を理解して他国の人たちと交流することの大切さを知った。これからも、インドネシアのみならず様々な国へ留学してみたい。または、日本以外の国で卒業後に何らかの仕事ができたならとも考えるようになった。